かたよらない道

道を修めるものとして、避けなければならない二つの偏った生活がある。その一つは、欲に負けて、欲にふける卑しい生活であり、その二つは、いたずらに自分の心身を責めさいなむ苦行の生活である。

この二つの偏った生活を離れて、心眼を開き、智慧を進め、さとりに導く中道の生活がある。

この中道の生活とは何であるか。正しい見方、正しい思い、正しいことば、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しい記憶、正しい心の統一、この八つの正しい道である。

すべてのものは縁によって生滅するものであるから、有と無とを離れている。愚かな者は、あるいは有と見、あるいは無と見るが、正しい智慧の見るところは、有と無とを離れている。これが中道の正しい見方である。

一本の材木が、大きな河を流れているとする。その材木が、右左の岸に近づかず、中流にも沈まず、陸にも上がらず、人にも取られず、渦にも巻き込まれず、内から腐ることもなければ、その材木はついに海に流れ入るであろう。

この材木のたとえのように、内にも外にもとらわれず、有にも無にもとらわれず、正にも邪にもとらわれず、迷いを離れ、さとりにこだわらず、中流に身をまかせるのが、道を修めるものの中道の見方、中道の生活である。

道を修める生活にとって大事なことは、両極端にとらわれず、常に中道を歩むことである。

すべてのものは、生ずることもなく、滅することもなく、きまった性質のないものと知ってとらわれず、自分の行っている善にもとらわれず、すべてのものに縛られてはならない。

とらわれないとは握りしめないこと、執着しないことである。道を修める者は、死を恐れず、また、生をも願わない。この見方、あの見方と、どのような見方のあとをも追わないのである。

人が執着の心を起こすとき、たちまち、迷いの生活が始まる。だから、さとりの道をあゆむものは、握りしめず、取らず、とどまらないのが、とらわれのない生活である。

さとりにはきまった形やものがないから、さとることはあるがさとられるものはない。

迷いがあるからさとりというのであって、迷いがなくなればさとりもなくなる。迷いを離れてさとりはなく、さとりを離れて迷いはない。

だから、さとりのあるのはなおさまたげとなる。闇があるから照らすということがあり、闇がなくなれば照らすということもなくなる。照らすことと照らされるものと、ともになくなってしまうのである。

まことに、道を修めるものは、さとってさとりにとどまらない。さとりのあるのはなお迷いだからである。

この境地に至れば、すべては、迷いのままにさとりであり、闇のままに光である。すべての煩悩がそのままさとりであるところまで、さとりきらなければならない。

（財団法人　仏教伝道協会『仏教聖典』より）